鹿 丸ごと有効活用

氷上に加工施設

獣害対策 年1000頭を解体

獣害対策のために駆除した鹿を処理し、食肉やドッグフードの原材料にする「シカ有効活用処理施設」が16日、丹波市氷上町谷村に完成した。鹿による農林業被害は県全体で年間約4億3500万円にのぼり、県は年間約3万5000頭の駆除を続けているが、大半は廃棄するしかなく、1頭を丸ごと活用できる施設が待望されていた。（中野眞一）

完成したシカ有効活用処理施設（丹波市氷上町で）

丹波市猟友会と、鹿肉の加工販売会社「丹波姫もみじ」、ドッグフードの製造販売会社「EGサイクル」の市内2社が2012年に設立した「鹿加工組合丹波」（深田晋三組合長）が、丹波姫もみじ社の構内に建設。総事業費2600万円は全額が国の補助で、鉄筋平屋約150平方㍍には最大20頭を保管できる冷蔵庫や冷凍庫、処理室がある。

市内では、年間約1600頭（12年）が捕獲されており、施設では年間約1000頭を解体して食肉用と非食肉用に販売している。しかし、食肉にできるのは良質のものに限られ、1頭で約3分の1しか使えない。このため、残りは山中への埋め立てや焼却しかなく、環境悪化や焼却費用が課題になっていた。

市は国の有効活用事業の参加者を公募し、昨年8月に鹿加工組合丹波が有効活用施設の設置、運営者に決まった。同組合は今後、内臓の土壌改良材への再利用も研究し、将来は肉加工拠点を目指す。

落成式で深田組合長は「全国に先駆けた有効活用のモデルとなるよう努める」と述べ、辻重五郎市長は「鹿肉を丹波市ブランドとして全国に発信し、観光振興と雇用創出を図りたい」と期待した。

原材料はEGサイクル社に納入する。

丹波姫もみじ社では、年間約450頭を処理して食肉用に販売している。しかし、食肉にできるのは良質のものに限られ、1頭で約3分の1しか使えない。このため、残りは山中への埋め立てや焼却しかなく、環境悪化や焼却費用が課題になっていた。

市は国の有効活用事業の参加者を公募し、昨年8月に鹿加工組合丹波が有効活用施設の設置、運営者に決まった。同組合は今後、内臓の土壌改良材への再利用も研究し、将来は肉加工拠点を目指す。

落成式で深田組合長は「全国に先駆けた有効活用のモデルとなるよう努める」と述べ、辻重五郎市長は「鹿肉を丹波市ブランドとして全国に発信し、観光振興と雇用創出を図りたい」と期待した。